

# 母親が安心すれば子どもも安心

海外赴任したら父親として子育てにどう関わればいいのか。経験者に語ってもらった。

日外協 専務理事 坂部 隆 / 日外協 国際人事センター長 坂本冬海

## 身ぶり手ぶりを交え

**坂本** 今回の「海外・帰国子女教育アンケート調査」の結果を見ると、海外赴任が回復していることが分かります。家族帯同での赴任、特に就学前の幼児を連れていくケースが増えています。

1991～96年にタイに家族帯同で駐在しました。長女は生後2カ月から2歳までタイで育ちました。

**坂部** アメリカのシアトルに1995年から2年間、長男は当時3歳、長女は生後6カ月でした。子どもたちはよく熱を出しました。1人が調子悪くなると翌日には必ずもう1人も。病院は車を運転してハイウェイを30分ぐらい走らなければならないのですが、妻は来たばかりでアメリカでの運転には慣れていません。妻から連絡を受けると私が車を運転して子どもたちを病院に連れていくのです。身ぶり手ぶりも交え必死になって英語で症状を説明したのを覚えています。

**坂本** 子どもが熱を出すと大変ですね。勤務先の工場がバンコクから70キロ離れたところがあるので、妻から連絡を受けても駆け付けられません。妻が子どもを抱えてタクシーで病院に行きました。日本語も通じないし心細かったと思います。私にできることは、後で「大丈夫だった？」と聞くだけでした。

平日は子どもの寝顔しか見ていません。休みの日の朝、顔を合わせると普段見慣れない大人

がいるので、恥ずかしそうに母親の後ろに隠れて私の様子をうかがっていました。

**坂部** 日本にいる時と同じで平日に子どもとゆっくり接するのは難しかったですね。その分、休日は必ずと言っていいほど家族で出かけるようにしていました。ただ、普段の子育ては海外でもどうしても母親頼りになりがちでした。

**坂本** 妻にはまだタイに来たばかりで慣れていないのに子育てばかりか、買い物をはじめ家のことをいきなり何もかも任せてしまって……。電気代の請求書が届いていたのに妻に何も説明しないでそのまま放りっぱなしにしていたら、「明日から電気を止める」と通知が届いて慌てたこともありました。今考えると良くなかったと反省しています。

**坂部** もう遅いですね(笑)。

## 助け合いのネットワーク

**坂本** そんな中で妻にとって救いだったのは、同じ境遇の方と語学研修や日本人会のサークルで知り合えたことです。先輩お母さんたちに支えていただいたのです。情報がまだ少ない時代だったので、こうしたボランティアによる困ったときの助け合いは本当にありがたかったと言っています。現地の生活になじんできたら、お世話になった恩返しをと、今度はサポートする側に回って頑張るようになりました。

**坂部** 確かにそうしたつながりは大事ですね。

**坂本** 子どもにとっては、習い事をしたり友達の家へ遊びに行ったりすることで世界が広が